

* 古代史研究家・石合六郎

*福岡歴史研究会会員発表会・勉強会

* 奥野説で解ける邪馬台国
の位置

*①邪馬台国への道 はじめに

- いまだに不毛の議論を繰り返す「邪馬台国畿内論」が横行している。
- この議論には奥野正男氏の「行程論」で決着がついたと私は考えている。
- 今回はその考えにもとづけば、ほぼ場所も特定できることを皆さんと一緒に地図上で検討したいと思う。

主要4ルート説

- ①南を東に読み替える説(畿内説)
- ②伊都国を起点に放射式ルート説(榎説＝九州説)
- ③大和への東遷を反映した錯誤説(「新考邪馬台国への道」の安本説)
- ④帯方郡起点説(奥野説)

*①邪馬台国への道

①南を東に読み替える説(畿内説)

- 典型的な畿内説の一つ。魏志の東を南に読み替えている。日本列島が南に延びていたと当時、認識していたという説を弄する。



「混一疆理歴代国都之図」(竜谷大蔵)

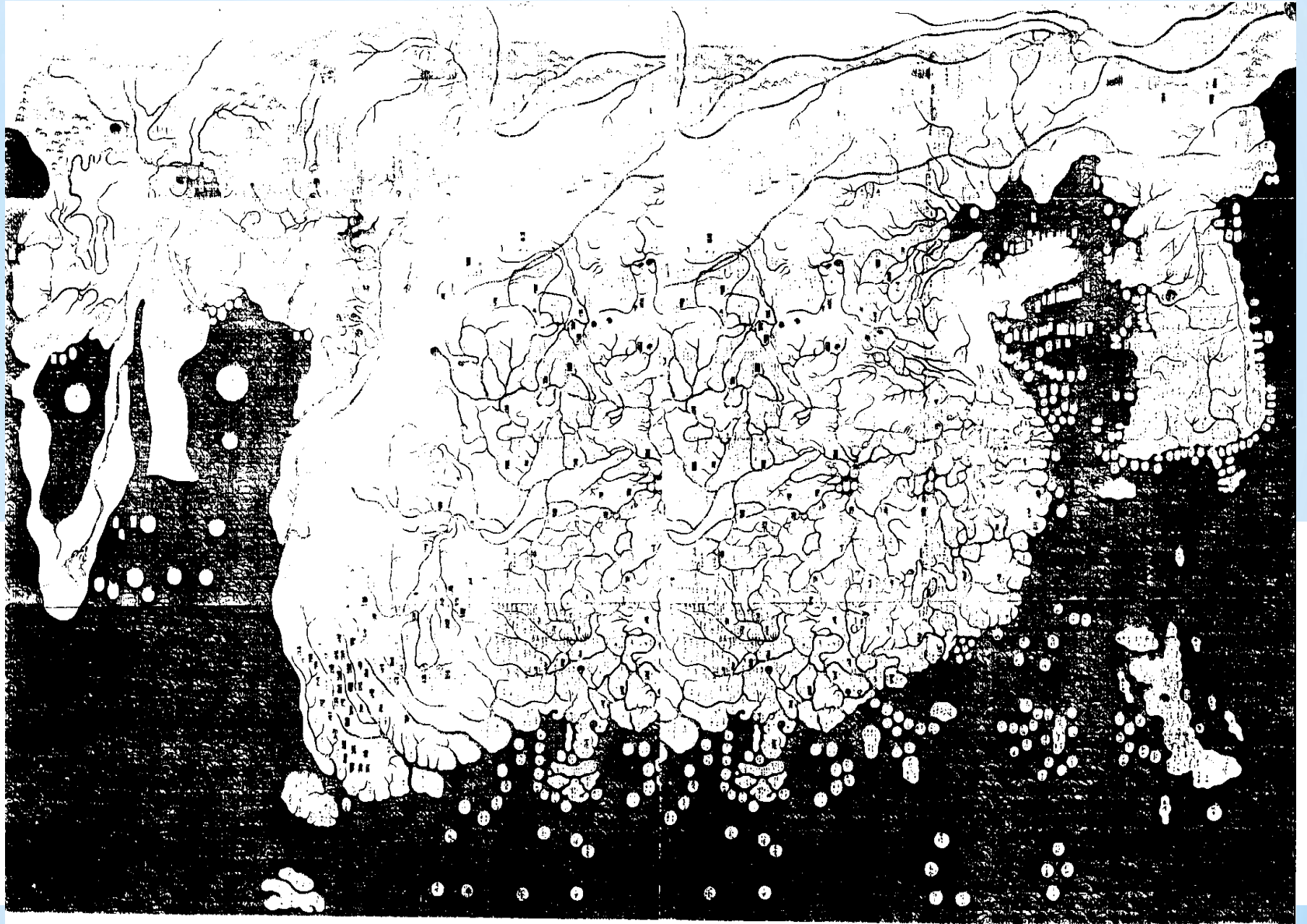


図 50 「混一疆理歴代国都之図」(竜谷大学蔵)

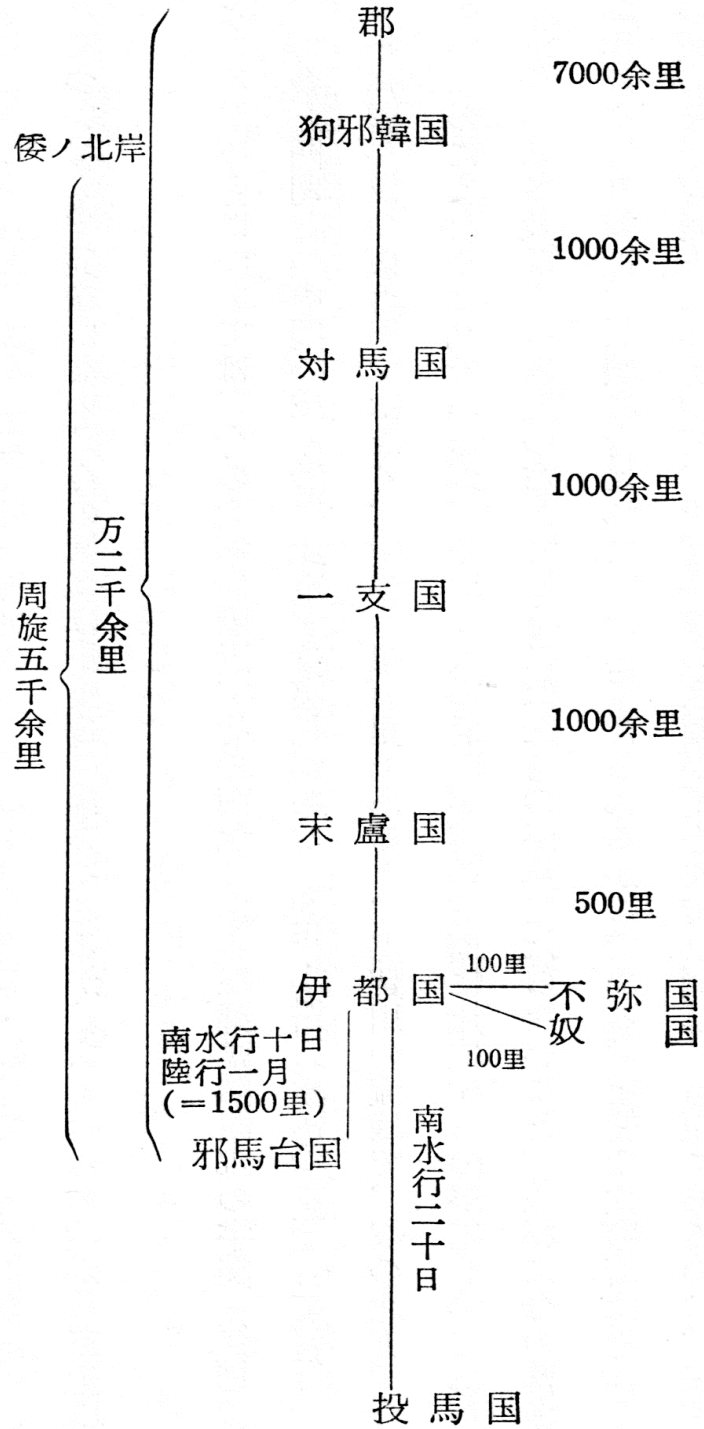
(地図はいずれも奥野正男著「邪馬台国はやっぱりここだった」p144, p145)



図 51 島原市本光寺蔵の地図（部分）

（地図はいずれも奥野正男著「邪馬台国はやっぱりここだった」p144, p145）

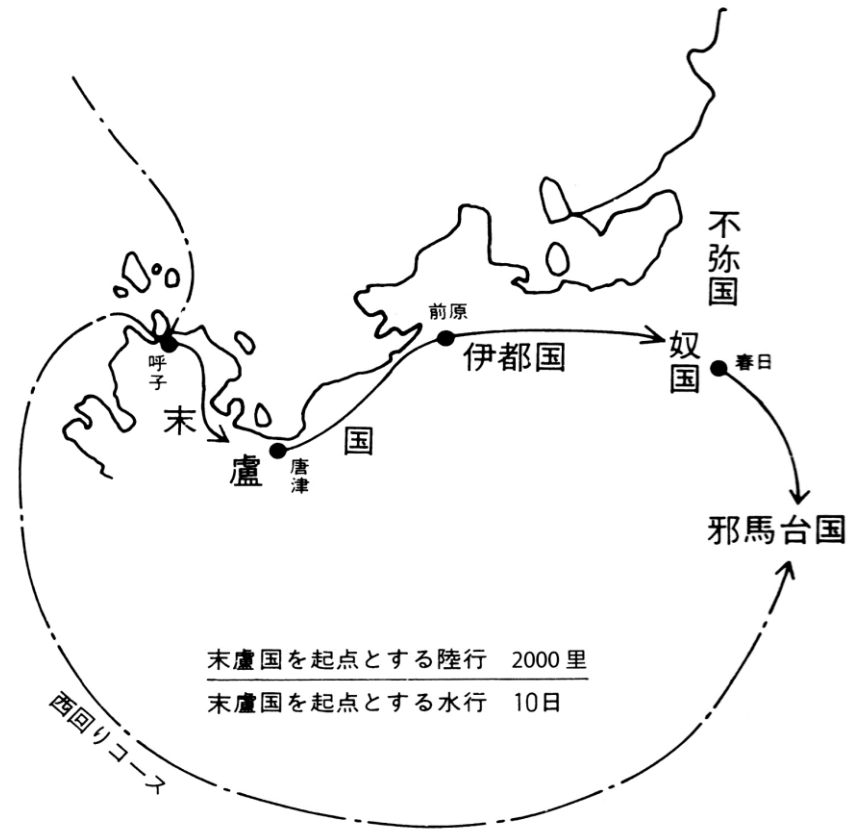
榎氏の伊都国を起点にした放射式ルート図



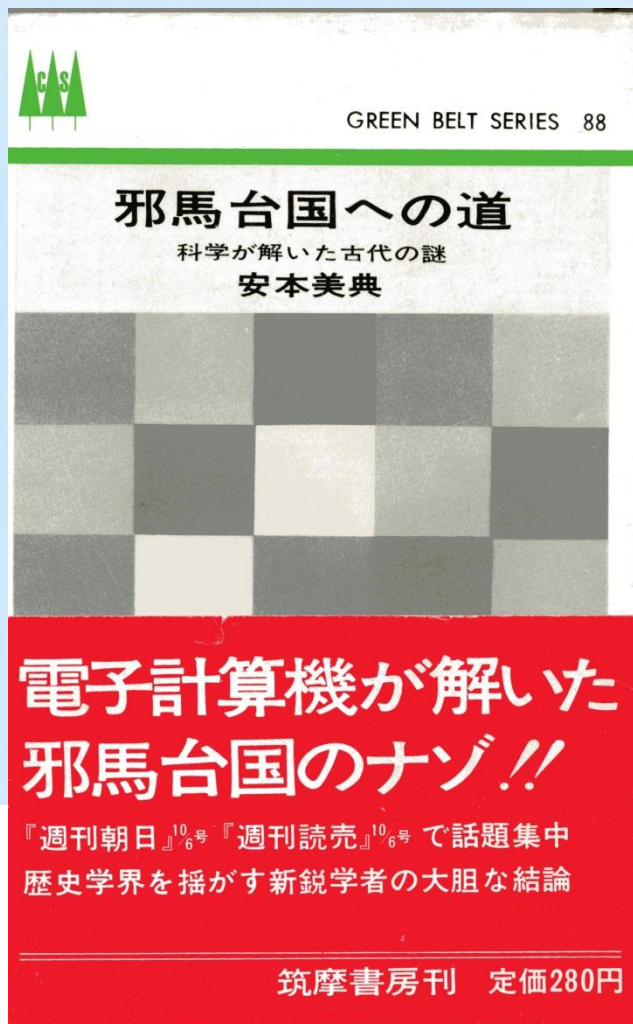
榎説で水行十日を説明した図

図 50 末盧国を起点とする「陸行一月」の算出

$$\begin{aligned} \text{陸行日数} &= \frac{\text{陸行合計里数(末盧国～邪馬台国間)}}{\text{一日の歩行里数}} \\ &= \frac{12000(\text{総里数}) - 10000(\text{末盧国までの区間累計})}{50} = \frac{2000}{50} = 40 \end{aligned}$$

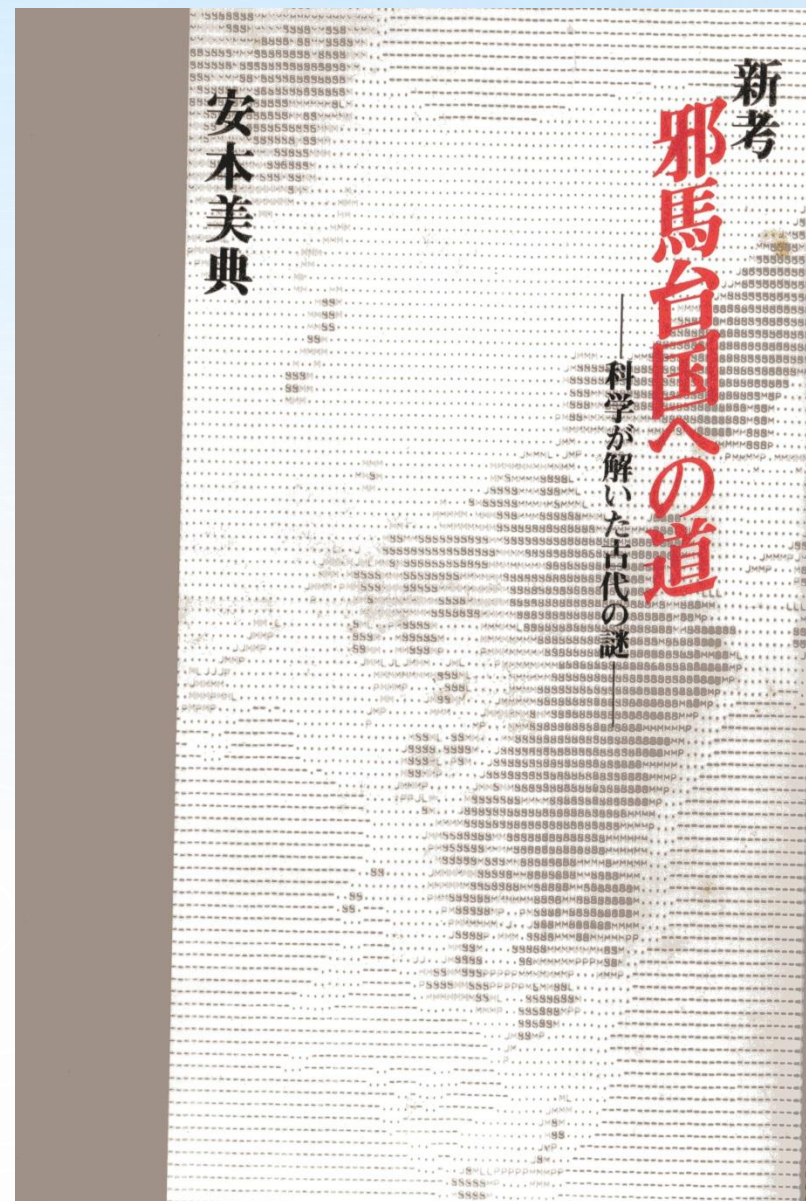


榎説で水行10日を説明した図＝奥野止男著「邪馬台国はここだ」から



昭和42年10月に初版

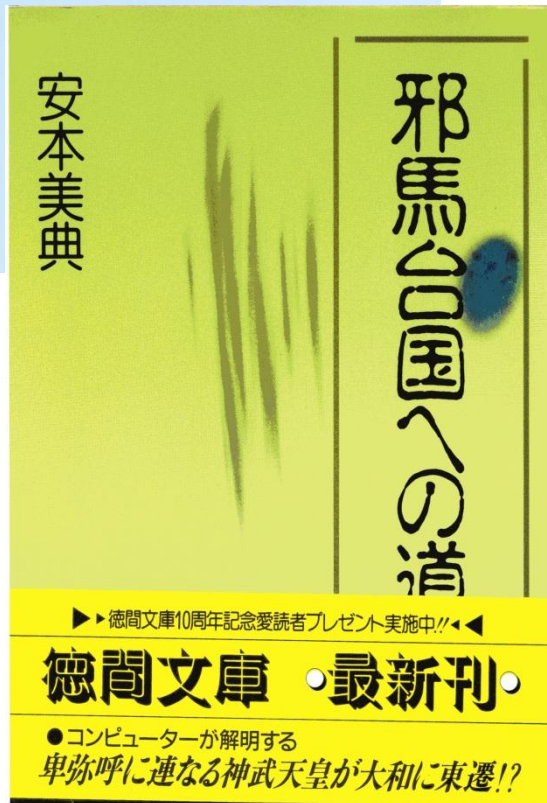
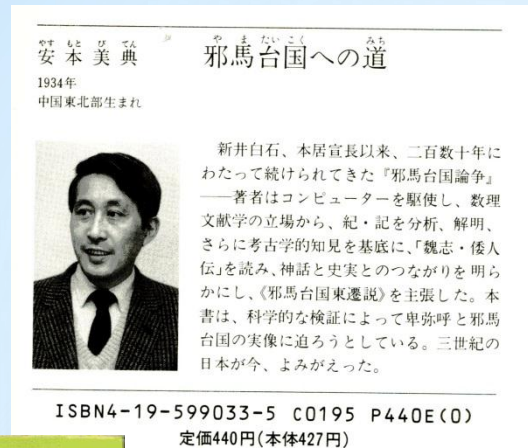
初版にも、最新にも錯誤説は述べられていない。「新考」だけで、一時的な仮説だったと思われる。奥野先生の帯方郡起点説を支持されていると思われる。



1977年（昭和五十二年）六月刊

1990年(平成2年6月刊)

1983年(昭和58年刊の
「卑弥呼と邪
馬台国」の
改題)



平成10年6月刊

「邪馬台国への道」は4種類の本がある

帯方郡起点説

奥野氏は帯方郡起点説をもとに、邪馬台国の筑後川北岸説をより強固にした。現段階で最も信憑性のある説といえる。

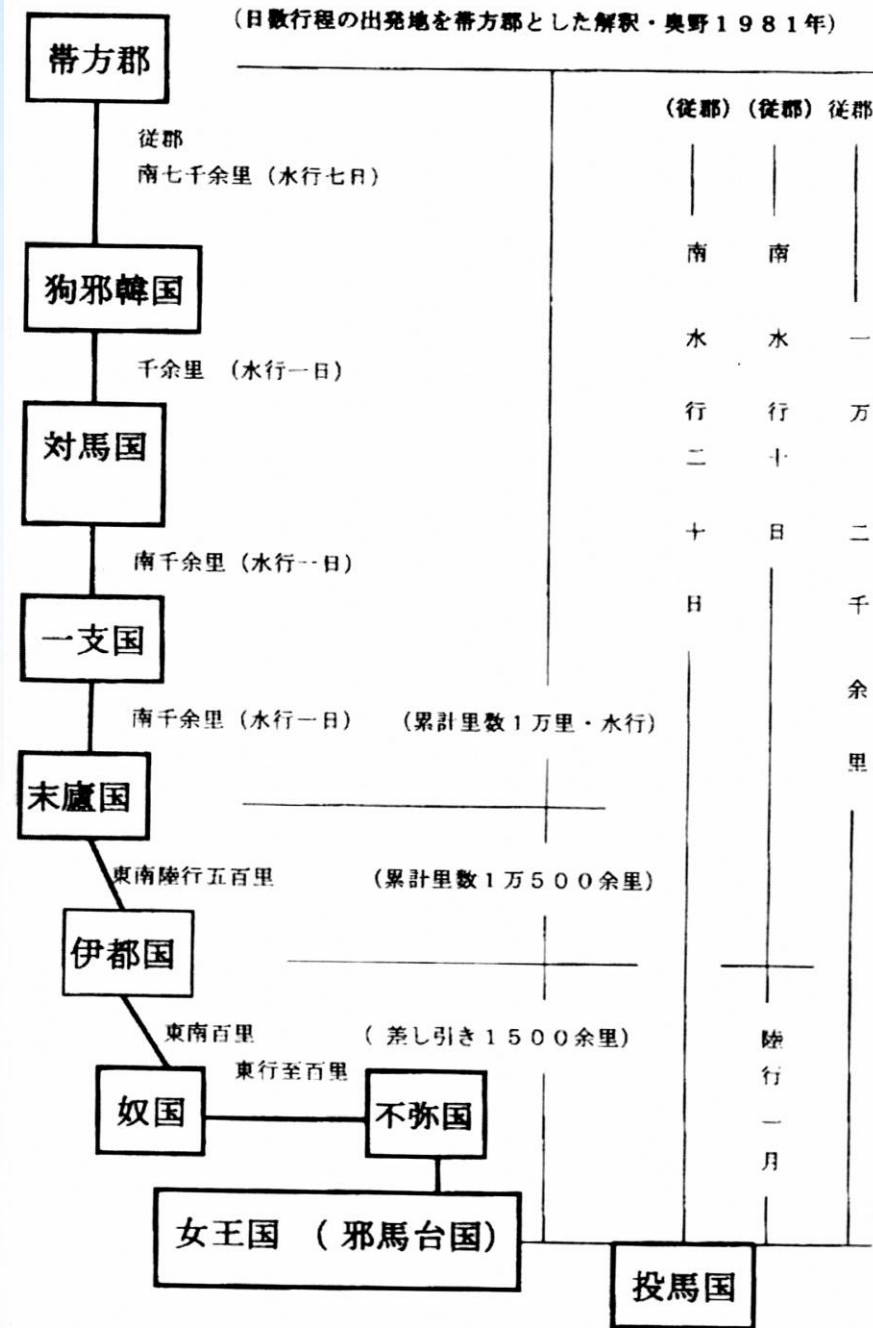


図10 邪馬台国への行程

キルビメーター

これなんですが、キルビメーター（マップメジャーともいう）といって、図面上の曲線の長さを測る道具なんです

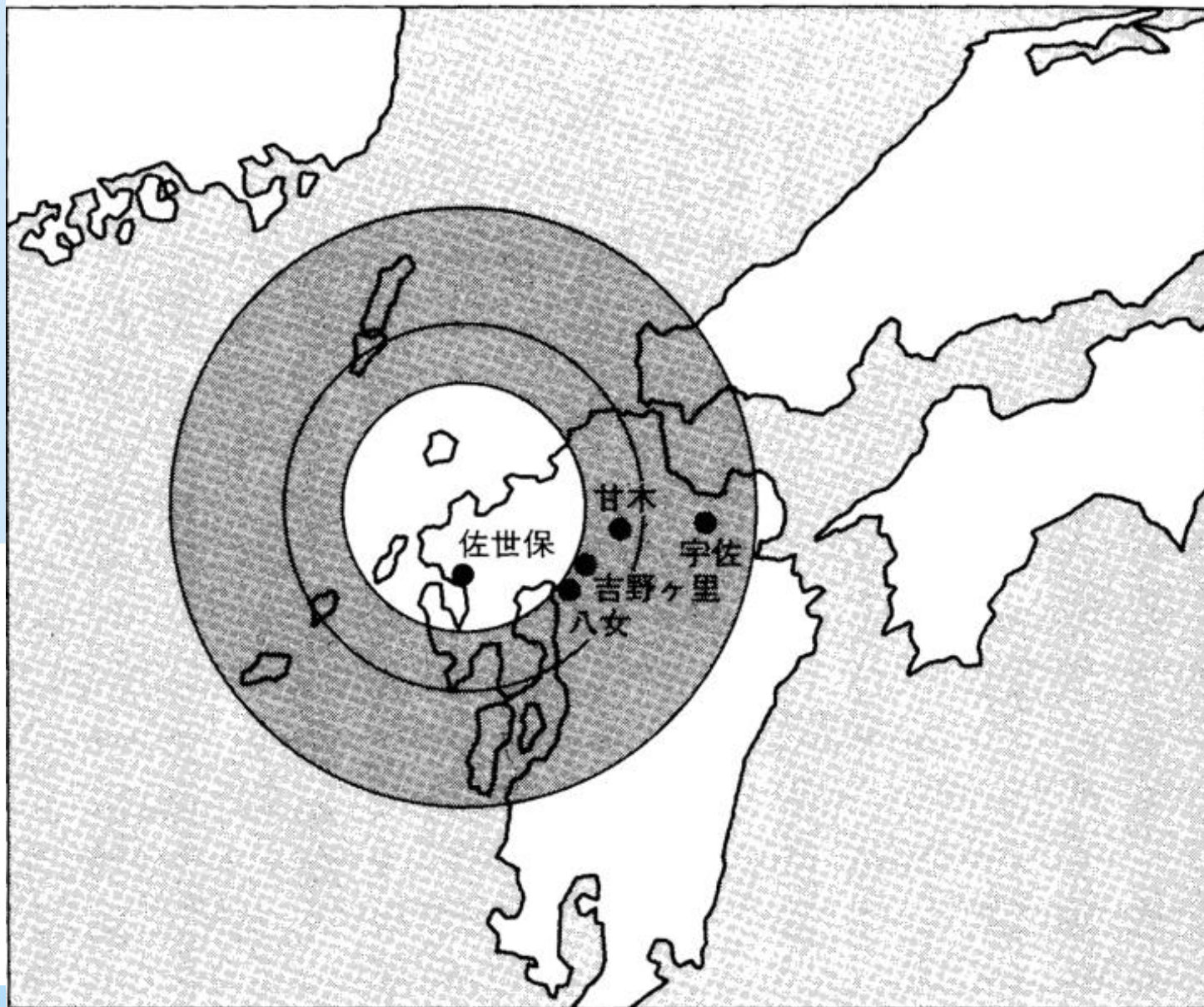
キルビメーターを使って住宅地図で目的地までの曲線（道）の長さを測り、そこから地図の縮尺の設定で計算、距離や徒歩、自転車等の所要時間を算出しています。よく広告に「〇〇まで徒歩5分！」とかありますよね。
（ブログから）

<http://www.adspacenet.co.jp/blog/2009/01/post-12.html>



論理的には正しい

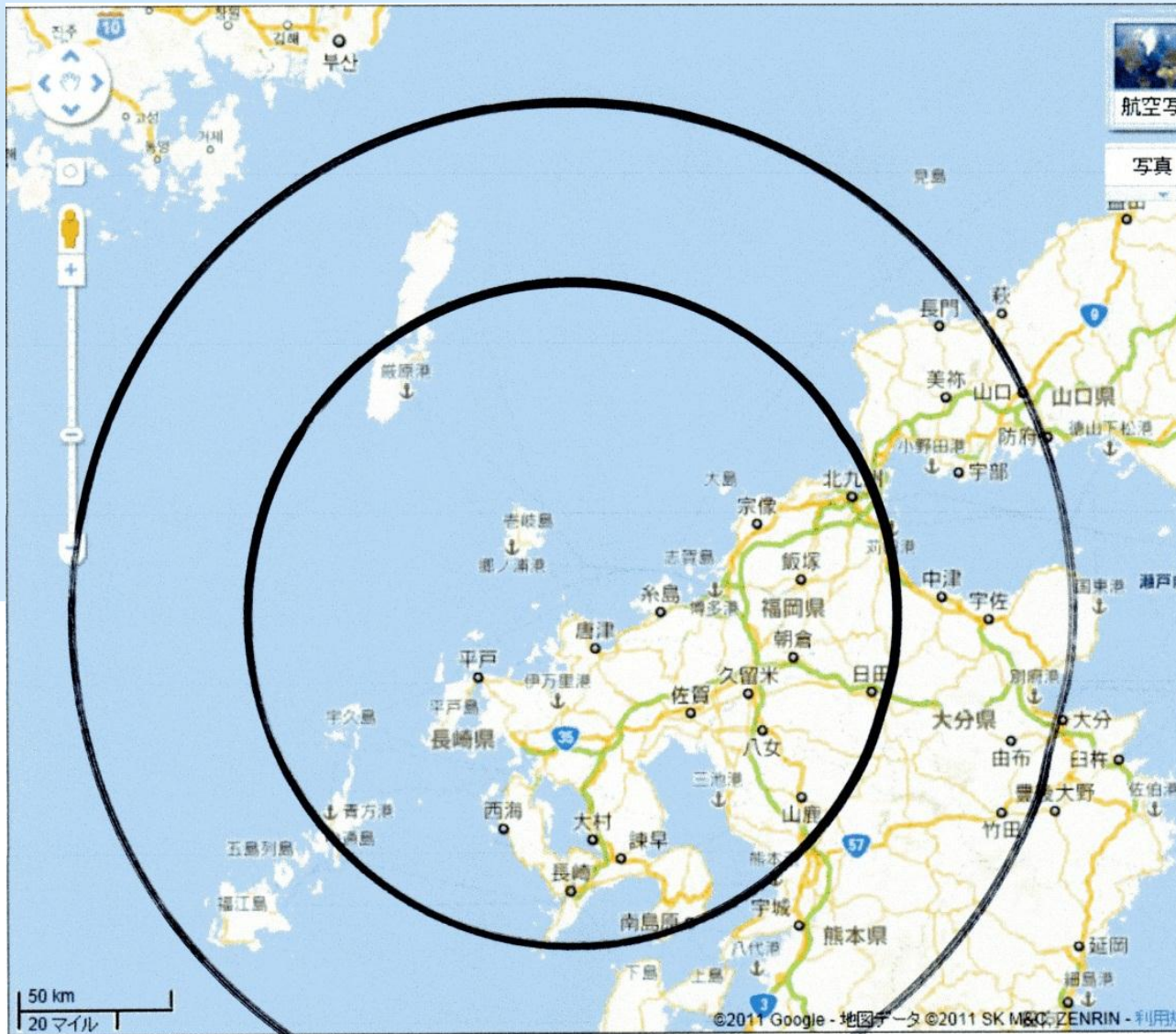
*②畿内説が成り立たない証拠



末盧国から邪馬台国の距離は2,000里の中にある。
帯方郡からの距離1万2000里から、帯方郡-末盧国間(7000里+3000里=1万里)を引いた結果=2000里

地図7 末盧国から邪馬台国まで(藤井滋氏による)

実践してみるとなぜか大きくなりすぎる



1里を約70メートルと考え、地図上に円を描いてみた。ところが、図より最小範囲が大きくなった。

2000里に無理があるか、1里70メートルに無理があるかだ。しかし、論理としては正しいので、この考えに基づく図が作れるかどうか、今回の検証のがカギとなる。

実践してみるとなぜか大きくなりすぎる

縮尺 = 50キロ = 2.4ミリ

最大範囲

2500里とする。

$2500 \times 70 = 175000 = 175$ キロ

$175 \div 50 \times 24 = 84$ ミリ = 8.4センチ

最小範囲

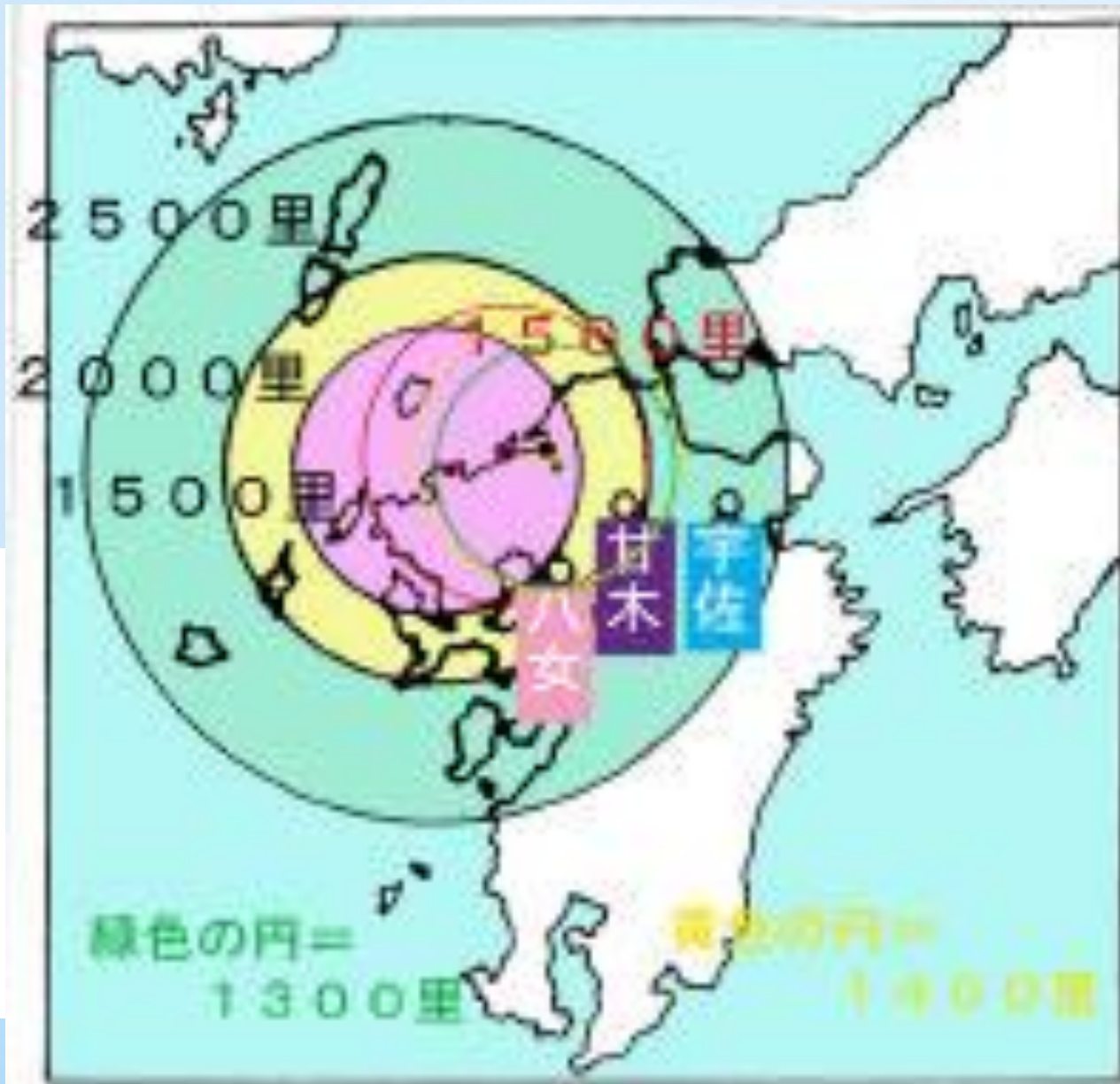
1500里とする。

$1500 \times 70 = 105000 = 105$ キロ

$105 \div 50 \times 24 = 50.4 = 5$ センチ

(Google地図で検証したもの)

9年前に示した図



この時は、元図が正しいと思いい、比率に従って、100里分ずつ小さくしていき、作製した。

自分で1からやってみないとわからないものという教訓を得た。

《倭人伝の1里は何メートルか》

	「魏志倭人伝」 の記述	実際の距離 (中数)	1里は何メ ートルか
帯方郡(京 城) → 狗邪韓国(巨済島) (あるいは南し、あるいは東す)	7000余里	630～710km (670km)	96m 弱
狗邪韓国(巨済島) → 対馬国(佐 原) (一海を渡る)	1000余里	64～120km (92km)	92m 弱
対馬国(佐 原) → 老岐国(原ノ辻) (南、一海を渡る)	1000余里	58～138km (98km)	98m 弱
老岐国(原ノ辻) → 末盧国(呼 子) (一海を渡る)	1000余里	33～ 68km (51km)	51m 弱
末盧国(呼 子) → 伊都国(井 原) (東南、陸行)	500 里	32～ 47km (40km)	80m
伊都国(井 原) → 奴国(春日市) (東南〔行〕する)	100 里	23～ 30km (26.5km)	265m
奴国(春日市) → 不弥国(宇美町) (東行する)	100 里	6～ 24km (15km)	150m
合 計	10700余里	912.5km	93m 弱

表2 「魏志」「倭人伝」の1里は何メートルか

《倭人伝の1里は何メートルか》

	「倭人伝」の 記述	実際の距離 (中数)	1里は何 メートルか
帯方郡(開城)→狗邪韓国(鎮海) (あるいは南し、あるいは東す)	7000 余里	580km~680km (630km)	90m弱
狗邪韓国(鎮海)→対馬(鹿見) (一海を渡る)	1000 余里	80km~110km (95km)	95m弱
対馬(鹿見)→耆岐(原の辻) (一海を渡る)	1000 余里	80km~120km (100km)	100m弱
耆岐(原の辻)→末盧国(呼子町) (一海を渡る)	1000 余里	47km~ 57km (52km)	52m弱
末盧国(呼子町)→伊都国(怡土) 伊都国(怡土)→奴国(那珂川町)	500 里 100 里	53km 16.5km	106m 165m
合 計	10600 余里	946.5km	89m弱

表19 『魏志倭人伝』の1里は何メートルか

「してはいけない」ことを試みる

奥野先生の批判したキルビメーターで測ったのは安本先生のことであるようだ。

二つの表でわかるように、出発点、経由地を確実に決めることは難しい。

しかし、おおよその位置は決められ、1里当たりの長さは思うほど異ならないことである。

北朝鮮内の帯方郡候補地



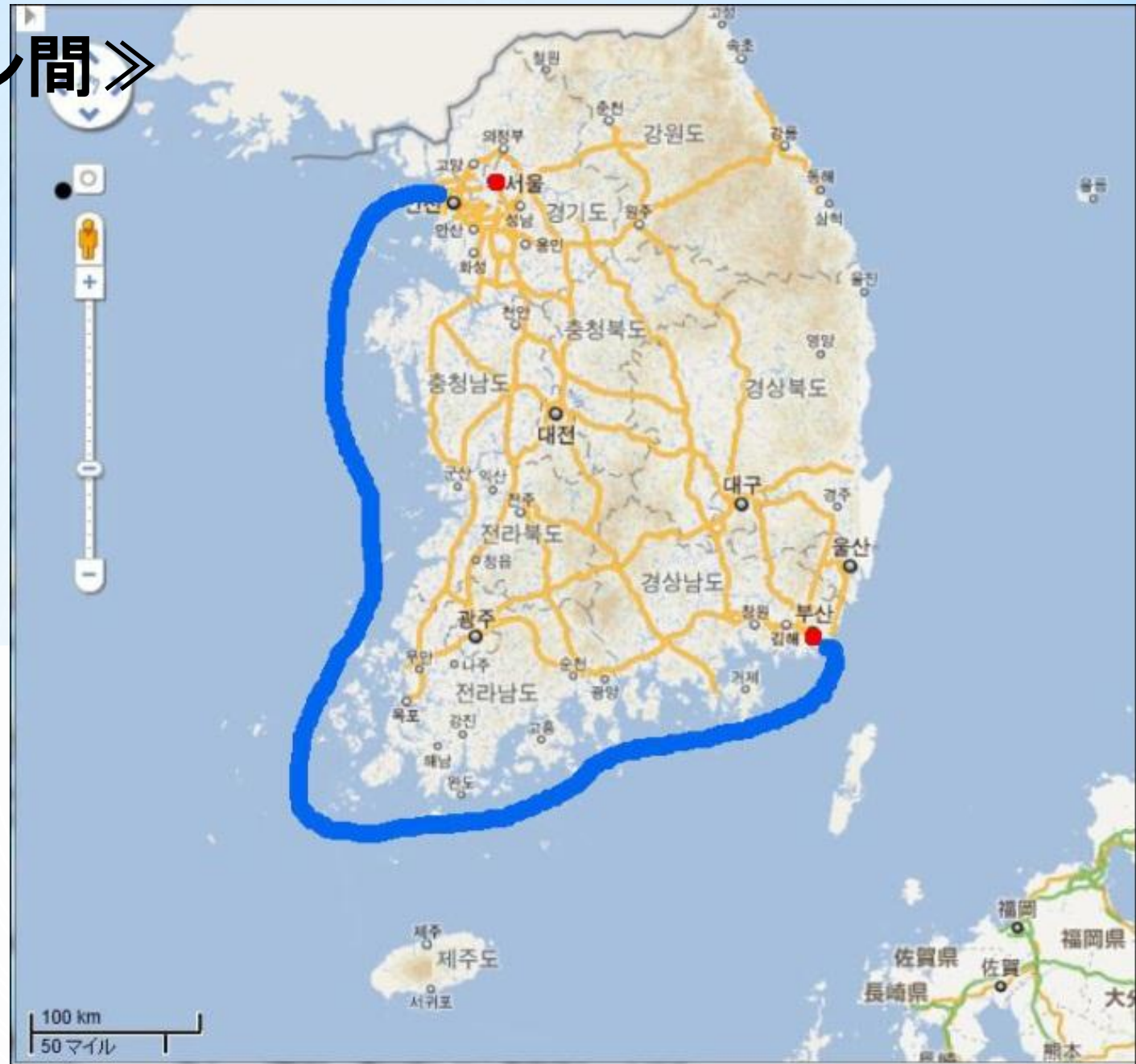
《ソウループサン間》

・ソウループサン間
は印刷物の上で20
センチ

・100 kmが3セン
チ。

・ $20 \div 3 \times 100 =$
670 km

・安本氏のデータと
ほぼ同じといえる。



ルート全長 20センチメートル

100キロは3センチ → $20 \text{センチ} \div 3 = 6.7$ $6.7 \times 100 = 670$ キロ

《プサンー厳原間》

- ・プサンー対馬・厳原間は印刷物の上で15センチ

- ・20 kmは2.4センチ

- ・ $15 \div 2.4 \times 20 = 116$ km

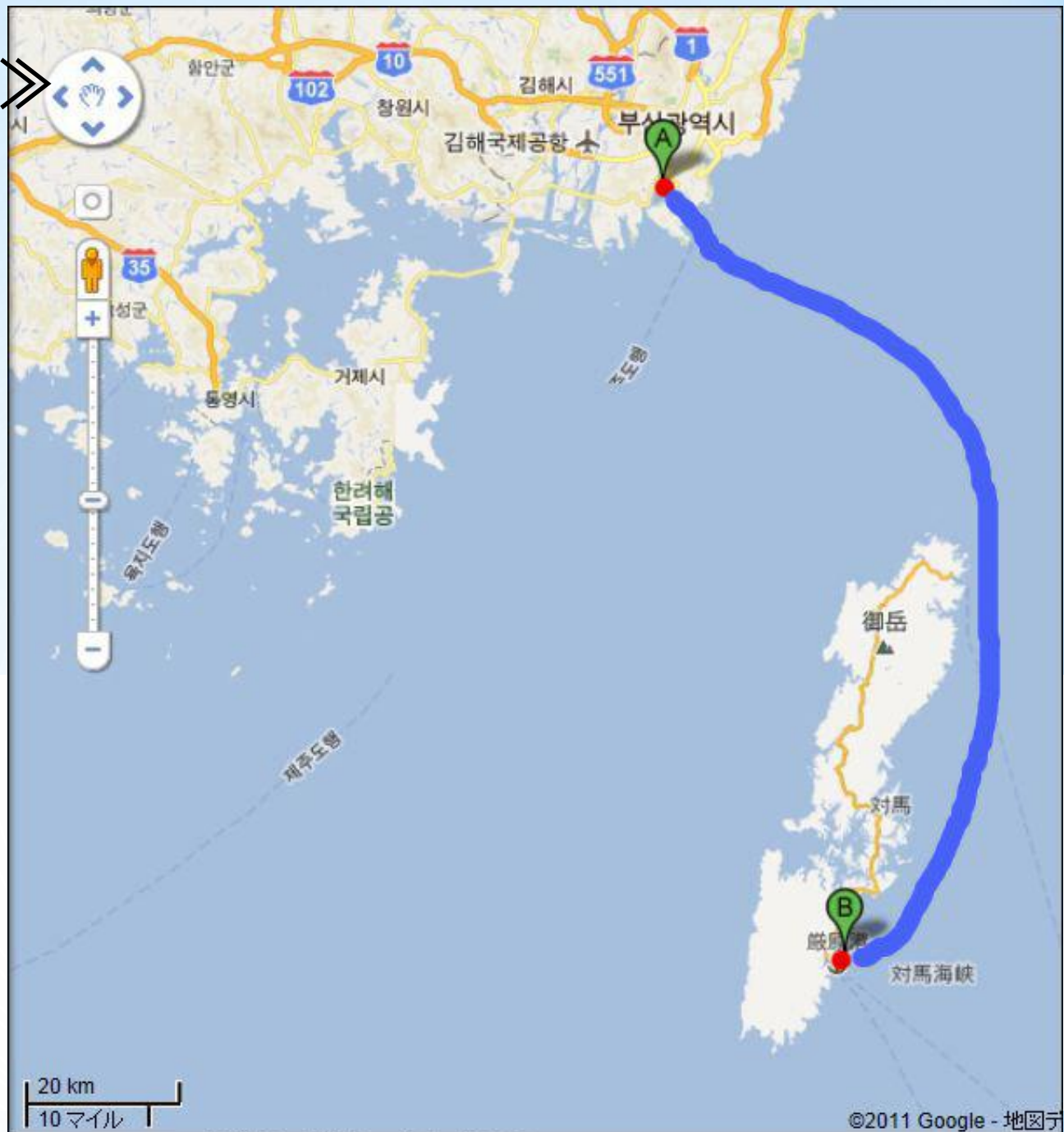
- ・対馬の南部の厳原を基点にしたため、安本氏のキルビメーターの結果(98キロ)とかなりの狂いが生じた。

- ・ソウループサン間は印刷物の上で20センチ

- ・100 kmが3センチ。

- ・ $20 \div 3 \times 100 = 670$ km

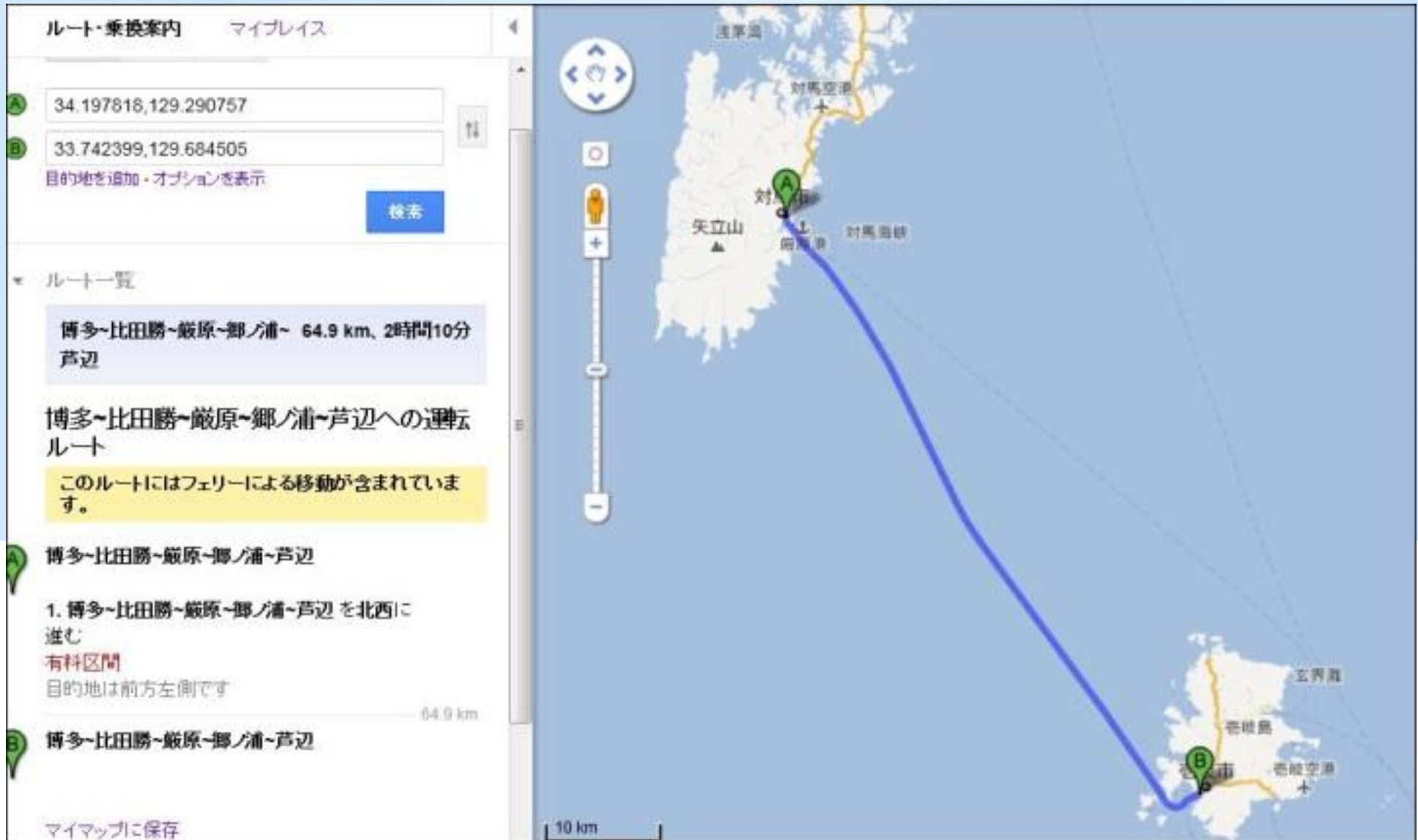
- ・安本氏のデータとほぼ同じといえる。



プサンー厳原 15センチ

20キロが2.4センチ → $15 \div 2.4 \times 20 = 116.6$

《 厳原一郷ノ浦間 》



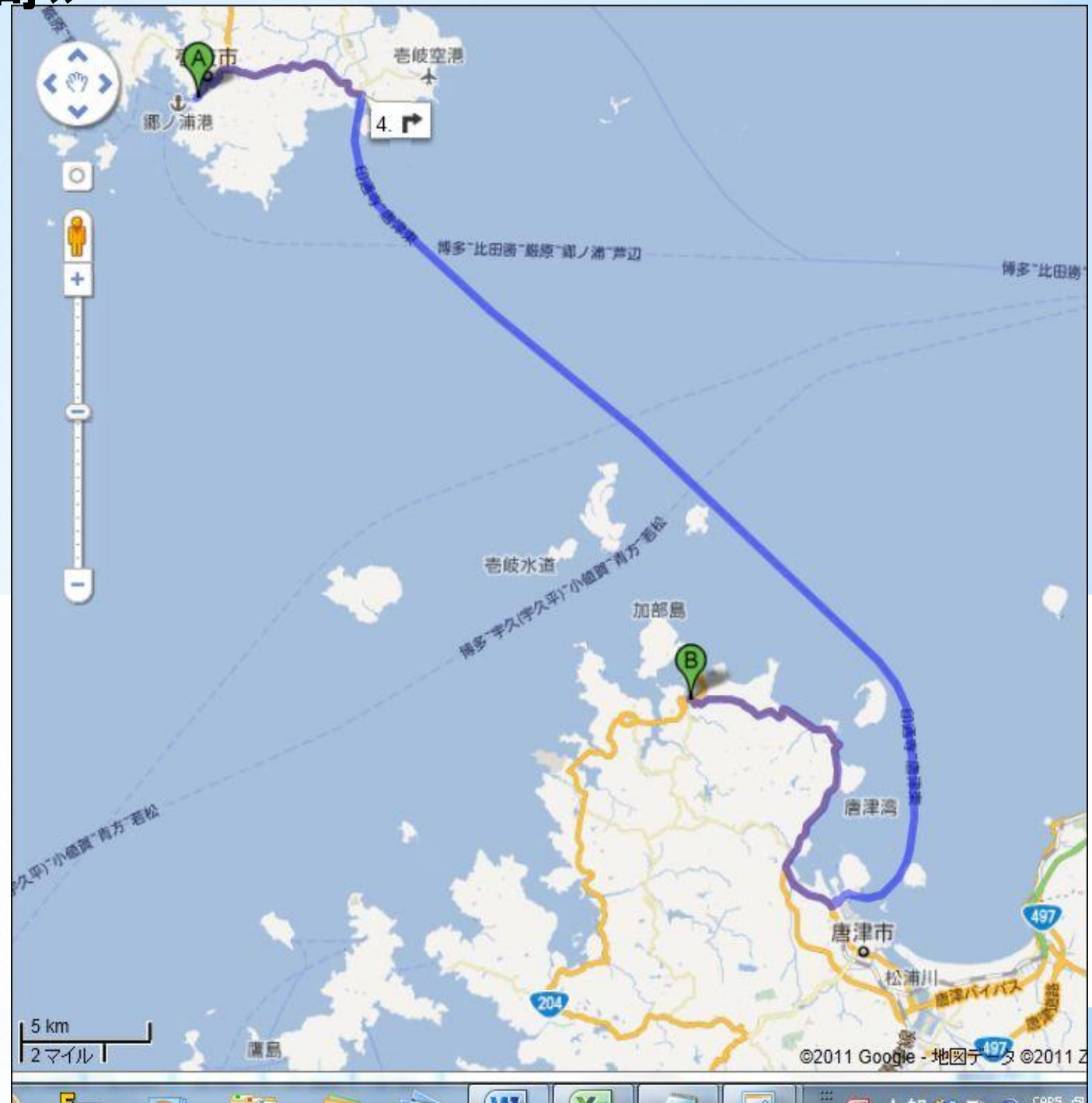
- ・国内はGoogle地図の二点間の自動車による距離時間計算を利用した。
- ・厳原一郷ノ浦 64.9 km
- ・地点の取り方ではらつきはあるが、安定した区間。

《 郷ノ浦－呼子間 》

・印通寺港－唐津壱岐フェリー発着所は41.2 km

・呼子に上陸地点を求めるとすると唐津壱岐フェリー発着所－呼子港館(16.7 km)を差し引く必要がある。その結果
 $41.2 \text{ km} - 16.7 \text{ km} = 24.5 \text{ km}$ となる。

・さらに呼子を上陸地点に求めるべきだが、現在呼子港－壱岐間のフェリーがないため、唐津に上陸し。そこから呼子まで戻った距離を引いたためか、安本氏のキルビメーター(51km)と大きな差が出た。24.5 kmは過大に小さいので10万分の1地図で測った30 kmが適正か？



《この結果を表にしてみる》

帯方郡から末盧国まで		魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離
	帯方郡(ソウル)―狗邪韓国(プサン)	7000 里	670 Km	95.71 m
	狗邪韓国(プサン)―対馬国(厳原)	1000 里	116 Km	116.00 m
	対馬国(厳原)―一大国(壱岐・郷ノ浦)	1000 里	64.9 Km	64.90 m
	一大国(壱岐・郷ノ浦)―末盧国(呼子)	1000 里	24.5 Km	24.50 m
	合計	10000 里	875.4 Km	87.54 m

平均値では安本氏の「季刊邪馬台国の表」
 (一里当たり平均93メートル)と、「邪馬台国
 への道」(同89メートル)

今回の計算結果87.5メートルは、起点や
 経由地が異なりながら、誤差の範囲に収ま
 っているようだ。

《時代別の中国の長さの単位の変化》

	周・春秋・戦国・前漢 前10～前1世紀	新・後漢 1～3世紀	魏 3世紀	隋 6～7世紀	唐 7～10世紀	宋・元 10～14世紀	明 14～17世紀
分(cm)		0.2304	0.2412	0.2951	0.311	0.3072	0.311
寸(cm)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11
尺(cm)	22.5	23.04	24.12	29.51	31.1	30.72	31.1
丈(m)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11
歩(m)	1.35	6尺 1.3824	6尺 1.4472	6尺 1.7706	5尺 1.555	5尺 1.536	5尺 1.555
里(m)	405	300歩 414.72	300歩 434.16	300歩 531.18	360歩 559.8	360歩 552.96	360歩 559.8

表3 長さの単位の時代別変遷表

(『角川漢和中辞典』による)

《地 域 的 短 里 説》

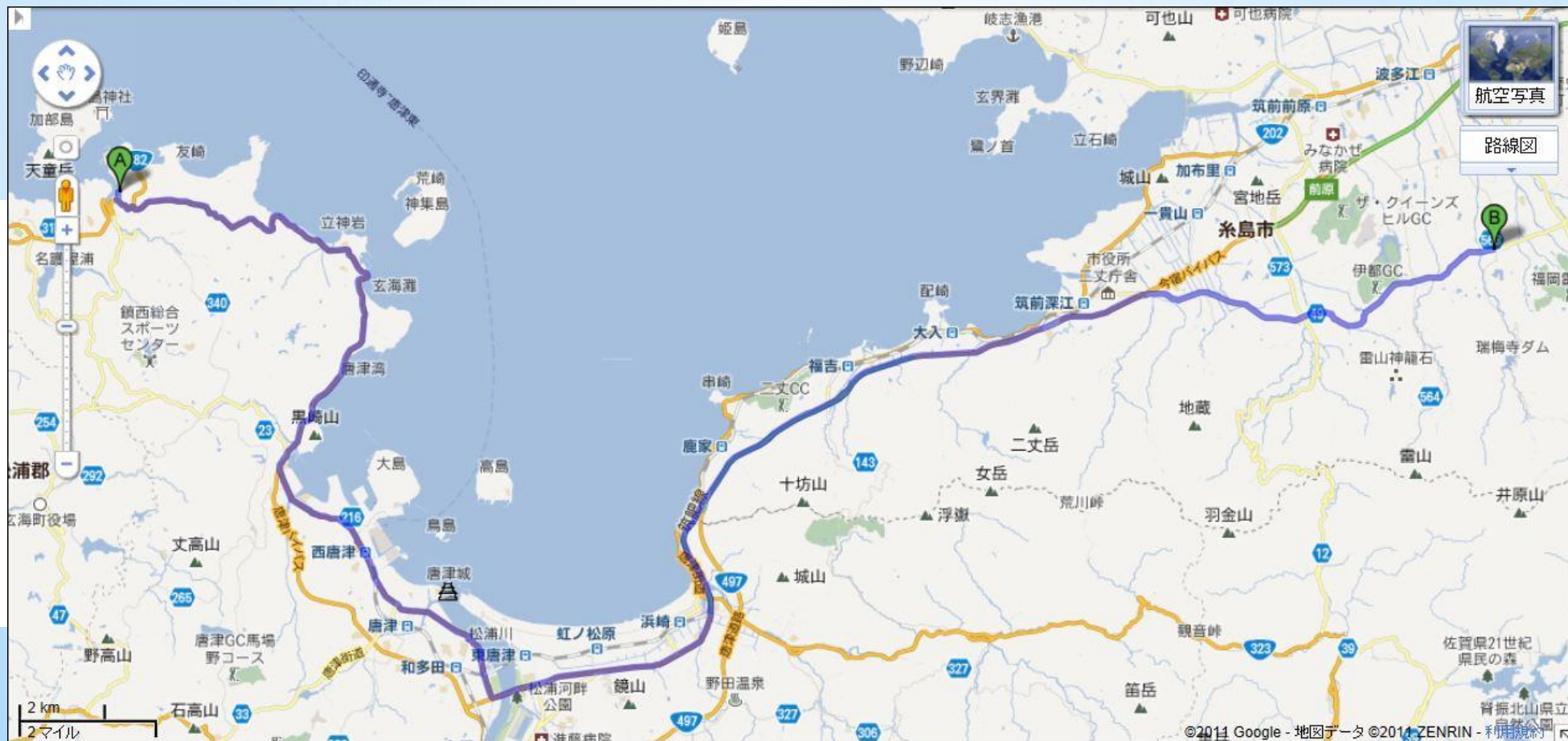
時代だけでなく、地域、支配者（グループ）によって使うモノサシは異なるようだ。

次にクニごとに見てみる。

《末盧国(呼子港)－伊都国(三雲遺跡＝細石神社近く)500里
実測52.4 km、1時間35分》

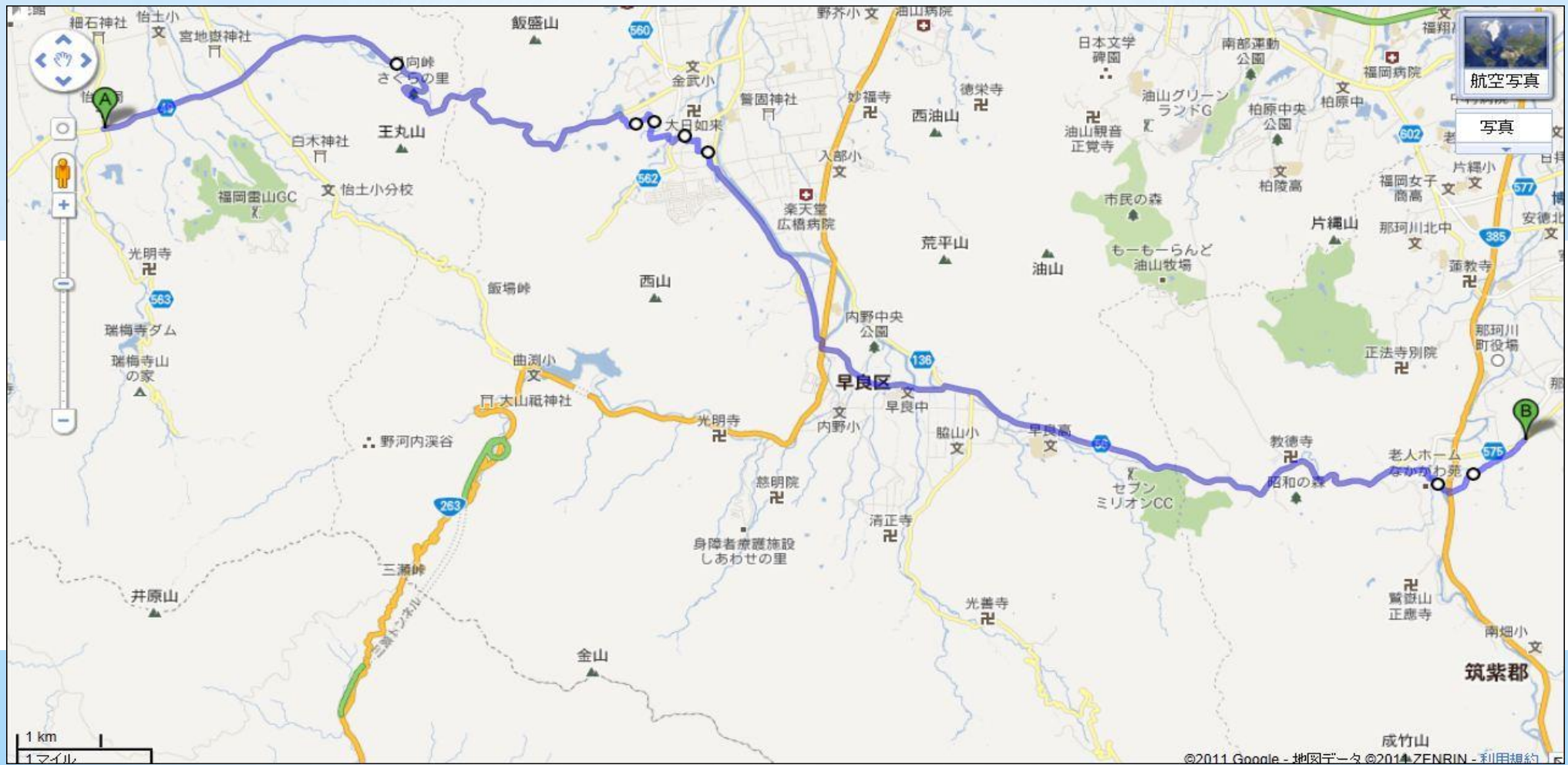
52.3キロを500里で割ると104.6kmで、1里当たりの距離はきわめて標準的な数値となる。

到着点を細石神社に近い国道に設定した理由は、三雲遺跡に近くて、日向峠への途中で県道に面していること。



《伊都国(三雲遺跡＝細石神社)－奴国(安徳台＝裂田神社付近)100里 実測25.2 km、1時間7分》

252キロを100里で割ると1里が236mとなり、1里100m前後の基準の2.5倍強となる。どこかに問題がある。それは比定地か？ 帯方郡からの距離の取り方か、また、魏志(陳寿)は倭の地理については、それぐらいの幅でしか、理解していなかったかのどれかであろう。



《奴国(安徳台＝裂田神社付近)－不弥国(宇美＝上ノ原)100里 実測 15.7 km、42分》

15.7キロを100キロで割ると1里は157mでやや長いが、許容範囲のように見える。奴国の都説もある須玖岡本遺跡付近を通るルートだ。



《錯簡があるか》

《不弥国以降の記述》

「...東行至不彌國百里

(東行不弥国に至る百里)

官曰多模副曰(卑)奴母離

(官を多模といい、副を卑奴母離という)

有千餘家

(千余家あり)

南至投馬國水行二十日

(南、投馬国に至る水行二十日)

官曰彌彌副曰彌彌那利

(官は弥弥といい、副を弥弥那利という)

可五萬餘戸

(五万余戸ばかり)

南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月

(南へ邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月)」

《邪馬台国への距離がない》

下線部分以降に、邪馬台国への方角と里数が書かれるべきだが、書かれていない。

ここで多くの邪馬台国論が分かれるところだが、奥野説では、「南至投馬國水行二十日」と「南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月」は帯方郡からであるとする。

この点が最も革新的で、邪馬台国へのルートがかなりうまく説明できそうだ。問題は本来の目的地である「邪馬台国」への方角と里数があるべきだと思うが、現実にはない。

想像にすぎないが、ここに「邪馬台国への方角と里数があるべきが、落ちている」との疑いを持っている。さらにいえば、奥野説の起点である「郡(帯方郡)より」も記載されていた可能性もある。

《水行10日陸行1月は、帯方郡から 出発すれば水行は妥当》

水行10日陸行1月は、帯方郡から出発すれば水行は妥当、陸行は確かに長く、榎説では唐の時代の基準である、1日の歩行距離50里から、伊都国－邪馬台国刊1500里を50里で割り30日を引き出したとする説、あるいは奥野氏の説だったかもしれないが、対馬・壱岐両島の距離(700里)を里数から引けば、末盧国－邪馬台国間は1300里で。三国志当時、一日当たり軍の進む距離40日で割れば32日で、陸行1月に近くなるという説もある。

水行20日の投馬国(与と馬の略字はそっくりで誤記。馬が与だったらトヨ＝豊と読める)は陸行の必要がない行橋市あたりの「豊の国」が最もふさわしい。帯方郡から末盧国が水行10日で、末盧国－投馬国10日は合理的である。

《残り里数から邪馬台国を探る》

末盧国から不弥国まで		魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離	邪馬台国への残り里数	対馬と壱岐の陸地部700里をさしひいた里数
末盧国からの					2000 里	1300 里
末盧国(呼子)－伊都国(三雲＝細石神社)		500 里	54.2 Km	108.40 m		
伊都国からの					1500 里	800 里
伊都国(三雲＝細石神社)－奴国(那珂川町裂田神社)		100 里	25.2 Km	252.00 m		
奴国からの					1400 里	700 里
奴国(那珂川町裂田神社)－不弥国(宇美町上ノ原)		100 里	15.7 Km	157.00 m		
不弥国からの					1300 里	600 里
合計		700 里	95.1 Km	135.86 m		

《2島の距離は加えるべきかどうか》

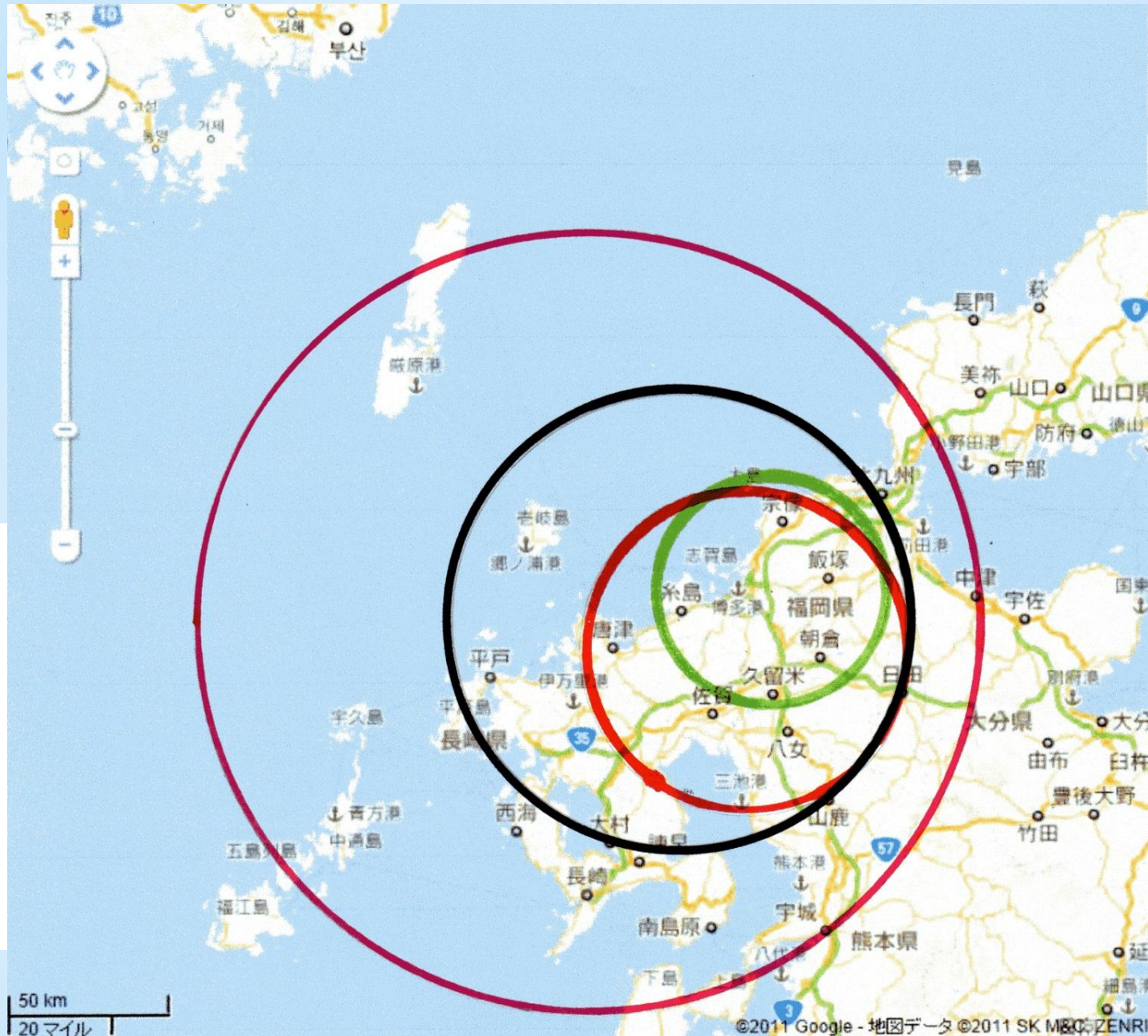
藤井説の円が過大な大きさになる問題で、対馬と壱岐島内の距離400里(対馬)と300里(壱岐)を差し引くと、きわめて整合性がとれる。。

《過小な伊都-奴国間、奴国-不弥国間の100里》

伊都-奴国間の100里を他の区間の比率に合わせ250里、
奴国-不弥国間の100里を150里として計算することにした。
その結果、末盧国以降の里数は下記の表のようになった。

末盧国から不弥国まで		魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離	邪馬台国への残り里数
	末盧国からの				1300里
	末盧国(呼子)-伊都国(三雲=細石神社)	500里	54.2 Km	108.40 m	
	伊都国からの				800里
	伊都国(三雲=細石神社)-奴国(那珂川町裂田神社)	250里	25.2 Km	100.80 m	
	奴国からの				550里
	奴国(那珂川町裂田神社)-不弥国(宇美町上ノ原)	150里	15.7 Km	104.67 m	
	不弥国からの				400里
	合計	900里	95.1 Km	105.67 m	

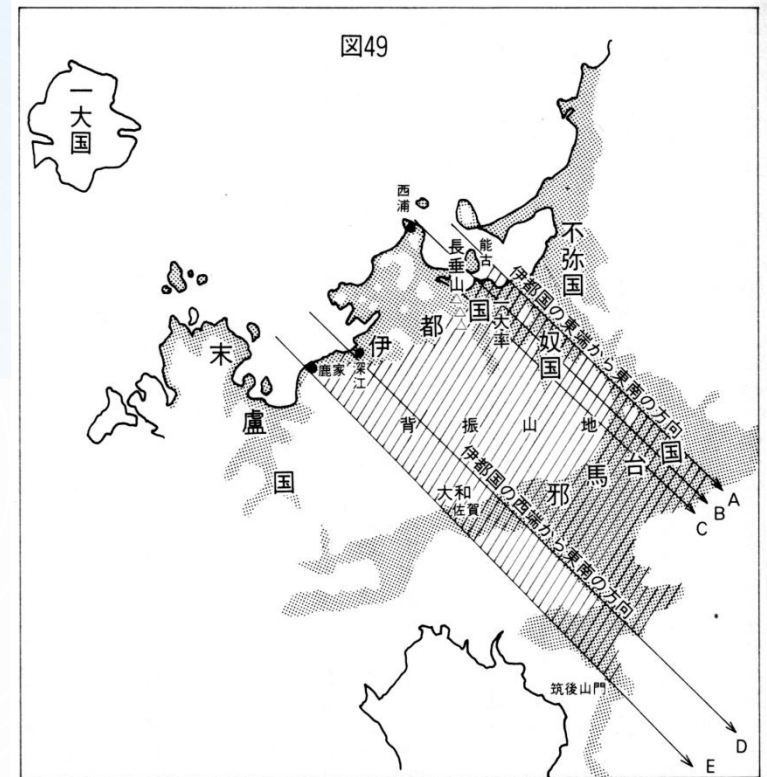
《地図上に1里100mで円を描いてみる。》



《邪馬台国は4つの円の重なった中にある》

あと方角情報をいれると、かなりの確率で邪馬台国の位置ははっきりするであろう。

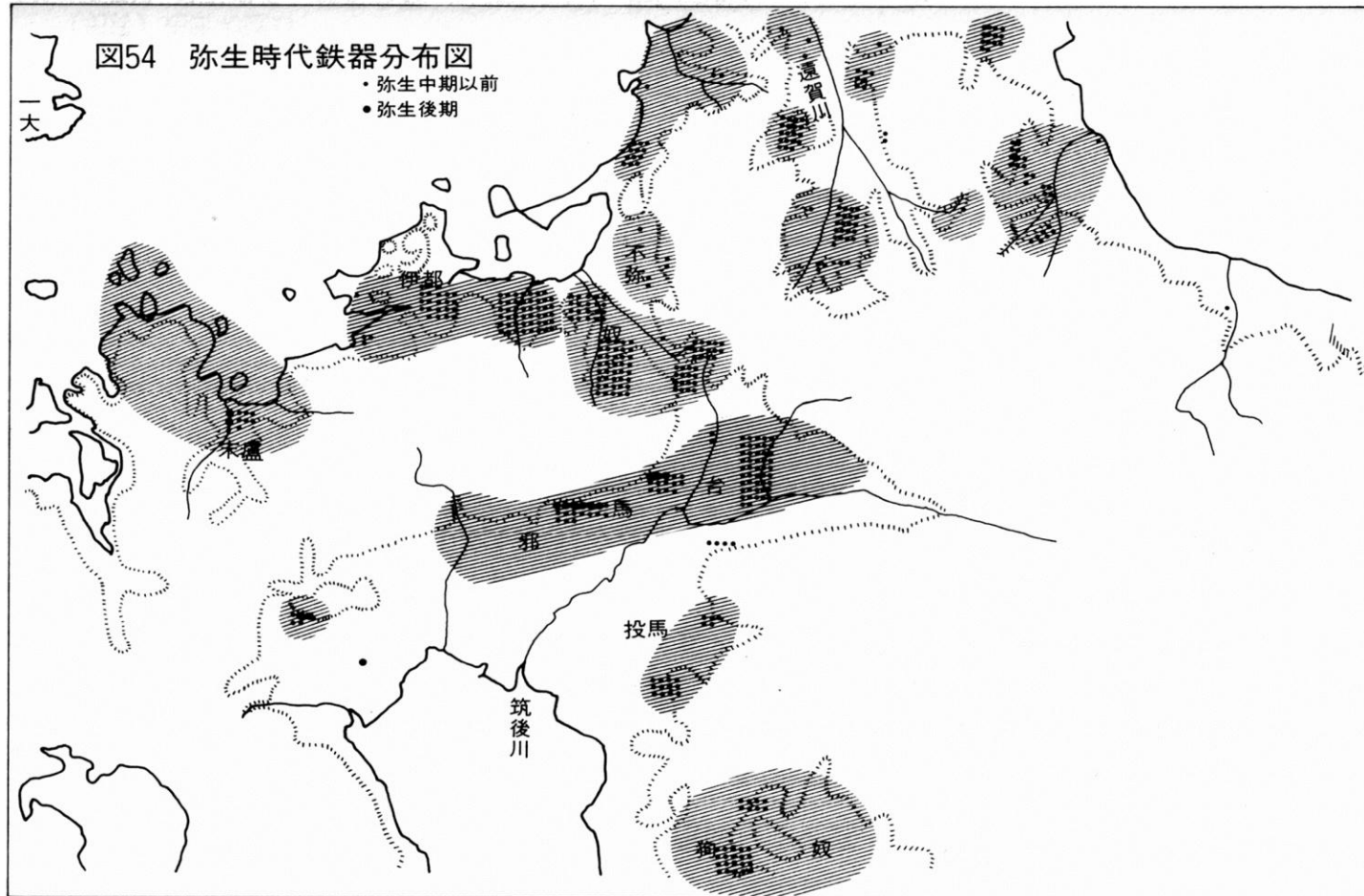
	魏志の方角	実際の方向
末盧国		
↓	東南	東
伊都国		
↓	東南	東(やや南に傾く)
奴国		
↓	東行	北東
不弥国		



魏の使いが来た時は、玄界灘の穏やかな、春から夏。45度反時計回りにずれる。

《遺跡集中情報を重ね合わせると》

円で示した候補地域内での弥生遺跡集中地と重ね合わせたとき、邪馬台国は朝倉・甘木、小郡、吉野ヶ里が候補地といえよう。日田はかする感じがた。



《奥野先生の旧説とその援用》

- ①放射式を認めていた
(末盧国—伊都国は1300里で対馬—壱岐間(1000里)の1.3倍)
- ②伊都国—邪馬台国間800里で壱岐間(1000里)の8割
- ③奥野先生は放射式を捨てている。この案は1里60メートル説である。
- ④不弥国—邪馬台国間は400里なので、1里60里を当てれば、24Kmとなる。

円は単純化するためのもの、1里60m～100mと考えれば、吉野ヶ里は消える。朝倉・甘木、小郡の確率が高くなる

《遊びごろろでいえば、日田は「天の八衢」(あめのやちまた)》

日田盆地へは多くの道が集まっている。現在は道路網の中心は高速道の鳥栖ジャンクションのように見えるが、地図を見てみると8つの方面(飯塚、行橋・中津、大分、阿蘇、菊池、久留米、朝倉)からの道が日田に集まっている。八衢は、猿田彦と天の鈿女の命の出会ったところでもある。猿田彦は塞曹掾士(さいそうえんし)・張(ちょう)政(せい)の化身とする説がある。2人は瓊瓊杵尊の命で結ばれ、子孫は猿目の君といわれる。鈿女の命は難升米か、その一族ではないかという説もある。

《オークションで買った掛け軸》



容齋筆意 星陵 和氣好察 謹書写 と書かれている

《不弥国-邪馬台国のコース①》

不弥国-邪馬台国(朝倉・甘木31.9 km)



不弥国-朝倉・甘木

31.9 km、1時間12分(県道35号線 と 県道77号線 経由地点: 県道35号線, 県道35号線, 県道77号線, 国道386号線バイパス/国道386号線)

1. 県道60号線 を南に進む 1.0 km
2. 障子岳南(交差点) を右折して 県道35号線 に向かう 110 m
3. 左折して県道35号線に入る 11.0 km
4. 永岡(交差点) を左折して 県道112号線 に入る 1.9 km
5. 山家道(交差点) を左折して 国道200号線 に入る 1.5 km
6. 右折して県道77号線に入る 2.2 km
7. 左折してそのまま 県道77号線 を進む 700 m
8. 右折してそのまま 県道77号線 を進む 6.2 km
9. 左折して国道386号線バイパス/国道386号線に入る 1.5 km
10. 持丸北(交差点) を右折して 国道322号線 に入る 1.9 km
11. 甘鉄駅前(交差点) を左折して 駅前通り/国道322号線 に入る120 m
12. 庄屋町(交差点) を右折して 千代丸通り/国道322号線 に入る そのまま 国道322号線 を進む2.6 km
13. 左折する 600 m
14. 右折する 76 m
15. 左折する 550 m 平塚川添遺跡の地点

《不弥国-邪馬台国のコース②》

不弥国-邪馬台国
(小郡25.4 km)



不弥国—小郡

25.4 km、51分 県道35号線 と 国道3号線 県道88号線(経由地点:
県道35号線, 県道35号線, 県道132号線)

1. 県道60号線1. 県道60号線 を南に進む1.0 km
2. 障子岳南(交差点) を右折して 県道35号線 に向かう110 m
3. 左折して県道35号線に入る8.1 km
4. 上宝満橋(交差点) を右折して 県道65号線 に入る2.3 km
5. 高雄(交差点) を左折して 国道3号線 に入る750 m
6. ランプを 国道3号線 方面に進む300 m7. 分岐点を 国道3号線に向
かって右方向に進む230 m
8. 国道3号線 に向かって進む86 m
9. 国道3号線 に向かって進む 38 m
10. 分岐点を 国道3号線 に向かって右方向に進む 94 m11. 分岐点を
国道3号線に向かって右方向に進む210 m
12. 斜め右に折れて国道3号線に入る7.3 km
13. 県道131号線 方面に向かって進む69 m
14. 分岐点を 県道131号線 に向かって右方向に進む200 m 15. 小倉
(交差点) を左折して 県道131号線 に入る 190 m 16. 県道132号線を
進む650 m
17. 右折してそのまま 県道132号線 を進む 1.9 km
18. 右折して県道88号線に入る 1.9 km 小郡・中心部。

《不弥国-邪馬台国のコース③》

不弥国-邪馬台国
(吉野ヶ里44.7
km)



不弥国-吉野ヶ里

44.7 km、1時間2分 長崎自動車道 県道325号線へ(経由地点: 県道35号線, 県道35号線)

1. 県道60号線 を南に進む1.0 km
2. 障子岳南(交差点) を右折して 県道35号線 に向かう 110 m
3. 左折して県道35号線に入る 8.1 km
4. 上宝満橋(交差点) を右折して 県道65号線 に入る2.3 km
5. 高雄(交差点) を左折して 国道3号線 に入る 750 m
6. 県道31号線 方面に向かって進む 300 m
7. 分岐点を 県道31号線 に向かって右方向に進む 230 m
8. 針摺(交差点) を右折して 県道31号線 に入る1.8 km
9. 武蔵交差点で県道7号線へ進む 1.0 km
10. 左折して 九州自動車道 方面のランプに入る有料区間450 m
11. 分岐点を 熊本・大分・長崎 の表示に従って右方向に進み 九州自動車道 に入る有料区間8.7 km
12. 鳥栖JCT を 大分道・大分・長崎道・長崎・佐賀 方面に向かって進む 有料区間450 m
13. 分岐点を 長崎道・長崎・佐賀 の表示に従って右方向に進み 長崎自動車道 に入る有料区間15.0 km
14. 高速東脊振IC を 東脊振 方面に向かって進む有料区間600 m
15. 分岐点を 神埼 の表示に従って右方向に進む有料区間30 m
16. 東脊振インター(交差点) を右折して 国道385号線 に入る 3.1 km
17. 鳥ノ隈南(交差点) を右折して 県道325号線 に入る650 m 吉野ヶ里遺跡

《不弥国以降？》

不弥国以降は邪馬台国に直接行ったかどうか、あるいはどの方向に行ったかは魏志には書かれていないが、不弥国の記事の後には「南至投馬国…」に続き、さらに南に邪馬台国があるとしているので、邪馬台国は不弥国の南にあたる。

不弥国の南は小郡だが、反時計方向にずれるので南東にある朝倉・甘木が邪馬台国の可能性が高い。奥野説の吉野ヶ里は反対にずれている。

3地点とも有力候補地には違いない。

3世紀の魏志の記事はある程度ゆるい基準で読む必要がある。

《これまでの倭人条》

(不弥国の情報)→に続いて

南至投馬国、水行二十日、官曰弥弥、副曰弥弥那利、可五萬餘戸。

南至邪馬台国、女王之所都、水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸。

自女王国以北、其戸数道里可得略載、其餘旁国遠絶、不可得詳。次有斯馬国、次有己百支国、次有伊邪国、次有都支国、次有弥奴国、次有好古都国、次有不呼国、次有姐奴国、次有対蘇国、次有蘇奴国、次有呼邑国、次有華奴蘇奴国、次有鬼国、次有為吾国、次有鬼奴国、次有邪馬国、次有躬臣国、次有巴利、次有支惟国、次有島奴国、次有奴国、此女王境界所盡。

其南有狗奴国、男子為王、其官有狗古智卑狗、不属女王。自郡至女王国萬二千餘里。

《新解釈の倭人条》

(不弥国の情報)→に続いて

南至邪馬台国、(至四百里)。女王之所都、官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸。

自郡至女王国萬二千餘里、水行十日、陸行一月。

(南)至投馬国、水行二十日、官曰弥弥、副曰弥弥那利、可五萬餘戸。

自女王国以北、其戸数道里可得略載、其餘旁国遠絶、不可得詳。次有斯馬国、次有己百支国、次有伊邪国、次有都支国、次有弥奴国、次有好古都国、次有不呼国、次有姐奴国、次有对蘇国、次有蘇奴国、次有呼邑国、次有華奴蘇奴国、次有鬼国、次有為吾国、次有鬼奴国、次有邪馬国、次有躬臣国、次有巴利、次有支惟国、次有島奴国、次有奴国、此女王境界所盡。

其南有狗奴国、男子為王、其官有狗古智卑狗、不属女王。

《言葉で説明すると》

- ・「南至邪馬台国」を先頭にし、(至四百里)を追加、「女王之所都...」に続ける。
- ・元の不自然な「自郡至女王国萬二千鎗里」を「可七萬餘戸。」の後へ移動。
- ・次いで「水行十日、陸行一月」を移動。
- ・「(南)至投馬国、水行...」の投馬国情報に続くものとする。
- ・「南」は「南至邪馬台国」の「南」の残ったもの、「自郡」を受けるのが自然。邪馬台国の南に投馬国があると書かれているなら、東に偏り、豊前豊後の「豊後」あたりとなる。
- ・「自郡」なら水行20日の地・投馬国は、行橋でよい。

《邪魔台国論者になったか？》

- ・仮説は必要である。
- ・仮説は1つの方が良い。仮説の上に仮説を立てることは屋上屋を架すことに近い。
- ・だが、仮説を立て、矛盾がないことが、誰でもが認める説への始まりである。
- ・屋上屋を架し、科学の名を借りる「邪魔台国畿内論」者の轍を踏まないよう気を付けよう。